ホームだより いなだいら

特別養護老人ホーム伊奈平苑
伊奈平苑高齢者在宅サービスセンター
伊奈平苑ケアプランセンター
伊奈平苑ホームヘルパーステーション
武蔵村山市西部地域包括支援センター

住所 東京都武蔵村山市伊奈平6丁目14番の2
電話 042-560-3916
URL http://www.inadairaen.com
mail info@inadairaen.com
編集・発行 社会福祉法人村山福祉会 編集係

特養ご利用者　白井　正敏　様の作品

〇ご利用者思い出話…P2～3
〇伊奈平苑写真館…P4　〇お知らせ・編集後記…P4

【経営理念】
■一人ひとりの生き方を大切にし、地域で安心して暮らせる時間と空間をつくります。
【経営方針】
■私たちは、ご利用者の人権を守ります。
■私たちは、ご利用者が安心して生活できるよう、心の通うサービスを目指します。
■私たちは、サービス向上を図り、開かれた経営を行います。
■私たちは、地域に根ざした運営に努めます。

特養・デイサービスのご利用者に、
懐かしい思い出を語っていただきました。

ご利用者思い出話

岸の里山の思い出

特養　中村　正奇　様

私は昭和四年、武蔵村山市の岸に生まれました。六人兄弟の四番目で、上は兄と二人の姉、下は弟二人です。

生家は武蔵村山の北西、ちょうど瑞穂町との境の近くで、すぐ裏手は山。今でいうと野山北公園が埼玉県の県境まで広がっている自然が豊かなところでした。

小さいころの遊び場はもっぱら山で、栗の実を拾ったり山菜を採ったりしました。

近くに水場がなかったので、時にはうす暗いけもの道を通って県境を越え、狭山貯水池まで行きました。今は貯水池での魚釣りは全面禁止されていますが、当時は釣り糸を垂らすとフナやコイがよく釣れました。

夏の間はここで水泳もしました。これも今では禁止ですが、懐かしく楽しい思い出です。

高等小学校に入ったころ第二次世界大戦が開戦。

卒業後十五歳で立川飛行機の工員になり、実家から毎日自転車で立川の工場まで通いました。

終戦時十七歳で、戦後すぐに必死になって運転免許を取り、立川の米軍基地で運転手の仕事に就きました。二十八歳で結婚し、日本郵便の運搬の仕事に転職しました。

家族と過ごしたのも岸です。娘が三人生まれ、妻は市内の文明堂の工場に勤め、よくおみやげにカステラを買って帰り、甘い香りが家に広がりました。

子供のころと変わらず、春には妻と一緒に山歩きし、わらびなどの山菜を採りました。妻が他界したのは十三年ぐらい前で、今自分は伊奈平苑で過ごしています。お嫁に行った三人の娘にも既に子供や孫ができ、会いに来てくれるのを楽しみにしています。

私と家族の思い出

デイサービス　古川　久美　様

私は昭和九年一月、かつて鹿児島県北西部にあり、今は薩摩川内市の一部になっている薩摩樋脇町で生まれました。生家は町の中の街道沿いで、父は大工をしていました。

母は、街道を牛車で往来する荷運びの人々に作りたての豆腐を食べさせるお店をしていたように記憶しています。

家の前の街道は川内駅まで続いており、とてもにぎやかなところでした。小さいころは兄弟や近所の子と町中でかくれんぼや鬼ごっこをして夕暮れまで遊びました。

私は八人兄弟の六番目で、一番上から姉が三人、その下に兄が二人、私をはさんで弟が二人という並びで、姉達は十以上離れていたので一緒に遊ぶという感じではありませんでした。私は当時体が弱く小さかったこともあり、姉達、兄達にこの上なく、必要以上にかわいがられていました。

姉達はいつも私のために洋服を作ってくれたり、まるで娘のように扱ってくれました。兄達は学校の行き帰りにぴったりとついて、まるでガードマンのようでした。

そんな私でも高校を出てから近くの農協に勤め、しばらく経つと金庫の鍵を預かるようにまでなりました。仕事はやりがいがありましたが、まだか、まだかと言われて三十歳代で結婚。当時夫は自衛隊員で、熊本県にしばらく住み、その後退職し日産に勤めるため上京、その時から武蔵村山に住んでいます。

現在夫と二人暮らし。一人息子は家庭をもち隣市に住んでいますが、お嫁さん共々よく気にかけて世話をしてくれています。私も夫も伊奈平苑に通って体を動かして、元気に暮らしたいと思っています。

熊本、東京、滋賀を移り住んで

デイサービス　山本（やまもと）　成也（せいや）　様

私は昭和十二年東京都中野区で生まれ、幼少時代は葛飾区金町（かつしかかなまち）で過ごしました。私は三人兄弟の長男で、五つ下に弟、その下に十二離れたもう一人の弟がいました。

金町は今でこそかなりの都会ですが、当時はもちろんビルなどなく、近くを流れる大きな江戸川に遊びに行ったことをなんとなく覚えています。

二歳で第二次世界大戦が勃発し、父は戦争に行きました。しばらくは母子で金町にいましたが、戦況の悪化とともに徐々に東京にいることが厳しくなり、小学校に上がる前に母の実家がある熊本県熊本市郊外の島崎（しまざき）に疎開しました。

そのころは友達とコマやビー玉、竹馬で遊ぶこともありましたが、多くの時間は勤労奉仕（きんろうほうし）で、田んぼでイナゴを集めたり、松の根を掘ったりしました。イナゴはもちろん食用で、松の根は油を採って、燃料などに使われていたようです。

父はインドシナにいましたが、終戦で帰国。家族で神奈川県川崎市に移り住みました。

上京の折、小倉から東京に向かう汽車の座席は自分が頑張って確保したのですが、汽車が動き出した途端、私たちの顔に寒風が吹きつけ、何事かと思ったらすぐ近くの窓が割れていたのです。がっかりしながら新聞紙を窓に当てて、長い旅路を何とかしのいだことが思い出されます。

新制の小学校を卒業し、横浜にある私立中学校に進学。その後、高等学校を経て一年浪人し大学の理系学科に入学しました。将来どのような職に就くかを考えた時、自分は人と何かを交渉したりするより、機械と向合って黙々と仕事をする方が向いていると思ったための進路です。卒業後は繊維（せんい）関係の会社の研究職に就きました。

入社してすぐに会社が研究を委託していた大学の研究室に派遣され、その二年後、二十五歳で結婚しました。

…ところで、結婚前の自分は、「元山成也（もとやまなりや）」という名前でした。結婚相手である妻の苗字が「山本」で一人娘だったため、そちらの名前を継いだ形になりました。

「元山」は弟が継いでいます。旧姓と新姓を合わせるとお茶や海苔の老舗（しにせ）メーカーみたいだと、結婚当時よく言われましたし、珍しいことだと自分でも思います。

結婚当初は国分寺市の社宅に住み、娘が二人生まれました。その後国立市の社宅に移り、ずっと社宅暮らしでも良いと思っていたのですが、当時、サラリーマンは家を持てという「持ち家制度」の推進（すいしん）で、上司から強く勧められたこともあり、武蔵村山市の分譲地に家を建てました。

しかし、現在も通説のようになっている「家を建てると転勤」が自分の身にも降りかかり、滋賀県彦根（ひこね）市に家族で引っ越すことになりました。当時は社員が地方に転勤する時、東京駅で同僚にバンザイ三唱で送り出されるという風習がまだあって、何ともいえない気持ちで強烈な印象として残っています。

彦根市は琵琶湖の東岸で、彦根城で有名なところです。琵琶湖は本当に対岸が見えないほど大きく、地元の人は琵琶湖を「海」と捉えているようでした。お店で売っている鮮魚も海の物より淡水魚が多かったです。

当初三年で戻れるはずだった滋賀での生活が八年続いたころに体調を崩し、長年勤めた会社を辞して東京に戻り、都内のコンピューター関係の仕事を八年。その後は川崎市の出版社に六十一歳まで勤めました。

義両親の介護も含め苦楽をともにした妻は、詩人としていくつかの詩集を出版しています。

娘達は嫁に行き、今は妻とネコの「マリノスケ」と、庭を眺めながら静かに暮らしています。

そして月・木曜日は、ここ伊奈平苑で入浴のお世話を頂いています。職員の皆様の暖かなお気持ちとお世話に深く感謝いたしております。

挿絵：奥様　紀子様の作品

伊奈平写真館

節分 2月2日

今年もいつもの鬼たちが来ました！
そして皆さんで豆を撒いて退治です。

彼岸法話　3月9日

周慶院のご住職に来ていただき、
お彼岸の法話をいただきました。

合同防災訓練　3月23日

地域自治会との合同防災訓練です。
いざという時の連携について訓練を行い
実際の動きを確認しました。

ちょこふらカフェ 3月22日

今年度最後となるちょこふらカフェの開催。
今回はよりよい眠りのためのセルフケアについてご講演と、ストレッチの実践も行いました！

伊奈平苑からのお知らせ

桜が咲きました

今年は４月が近くなっても、寒い日が続いており、苑の桜の開花も、例年より遅れておりました。４月に入ってから、ようやくツボミも膨らみ始め、その後、満開を迎えることができました。

編集後記

早春の味覚、フキノトウ。心地よい苦みと芳香があり、天ぷらや蕗味噌にすると美味しい山菜です。春には苦いものを食べると、体に良いそうですね。（編集係Ｋ）